

第 13 回関西建築家大賞 審査講評

審査建築家 横河 健

2015 年 9 月 25 日(金), 26 日(土) の二日間に渡って現地・選考審査を行わせていただきました。対象となった作品群、候補建築家の仕事は事前の書類審査をクリアーして現地審査の対象となっただけあって、そもそもレベルの高い作品群でした。中でも私なりのスクリーニングを通過した最終候補者たちのスキルと設計に向かう姿勢は驚くべきレベルに達している人たちだと言えるのではないのでしょうか。

さてこのような関西を代表する建築 / 建築家を選ぶ賞の審査ですから気楽に・・・と云う訳には行きません。建築の賞審査と云うものは、学会賞にしろ JIA の新人賞にしろ、たいていは目利きによる複数の審査員によって選ばれるものであって、最終的には審査委員同士の合議によって決まることが多いものです。しかしこの「関西建築家大賞」に限っては一人の審査員による独断が許されるものです。この独断が危ない・・・独断は独断で良いのですが、独断に筋が通っていなければならないし、ブレがあってはならないと思うのです。そのため私にとってはこの二日間否それ以上、東京に戻ってからかなりキツイ思いをしました。とくに現地審査の第一日目の最初に拝見する建物を見る目(私の眼)と、二日目の最後に拝見・体感する建築を見る目との間に私自身の精神構造の(肉体的な疲れも)ズレがないように・・・勤めることが大変キツイものでした。しかし、そういった意識は最初から気をつけていたので、その勤めもなんとか全う出来たのではないかと思います。しかしまだ続きがあります・・・現地審査を終わってもハッキリ一人に絞ることが出来なかったからです。最終的に現地審査を終えた段階でも四人(本多さん、長坂さん、岸下さん、畠山さん)に絞ってはいたものの、なかなか一人を選出することは出来ませんでした。東京に戻ってから、つまりより冷静に判断しようともスパッと決めると云うわけにはいかないものです。私は現地審査の各作品を拝見している道々記録を付けて行きました。自分自身の見方の記録で走り書きのメモのようなものですからすべてを公表する訳にも行かないのですが、そのときその時の印象批評とともに私なりの点数を付けていました。2 作品ずつ見させてもらっているのでその合計点が極端に離れば選択も出来るのですが、合計点では差が開きません。つまり一つの作品で感心してももう一つでは「おやっ」と思うことがあります。

しかしながら二つの作品の合計点も然ることながら、やはり関西建築家大賞を受賞するに相応しい人物・建築家として過去の仕事や建築家として社会の貢献度など含め、総合的な判断として長坂大さんを選出するに至りました。

長坂さんの作品「上賀茂の家」と「宇治のアトリエ」には私の印象としては差がありました。詳しくは後の評を読んで頂くとして、二つの作品には建築家の思い、集中力、こだわり、解決に導く決定力に差を感じました。しかしながら長坂さんの今までの仕事における真摯な姿勢や社会に問う姿勢は研究者としてのみならず建築家の社会的立場を律し、また建築の教育者としてもその立場を全うして来たことも加えてみる必要があると思いました。つまり、これらの総合力として選択に至ったと云えます。

以下、具体的な各 12 作品の審査講評です・・・(現地審査見学順)

魚谷繁礼 67 + 70 - α = 137 - α = 135

魚谷さんの西都教会は、一昨年私が新建築の月評を担当していた時に気になって取り上げたことがあり、期待していた作品である。しかし期待が裏切られたとは言わないが、教会の主室となる礼拝空間が歪んで見えるコトがまず納得が行かないところである。アプローチしてくる方向から対角方向に説教台があることに加えて、右手の壁が敷地の関係から他の三面の壁と異なる光の取り入れ方をしていて、つまり残念ながら建築の断面計画が平面の静謐さを失わせているのではないかと思われた。67

京都型住宅モデルは幹線道路から一本露地を入ったところであって、平入で前後に風が流れる、いわゆる京都の町家形式を継承していて嬉しい。構造計画や防火の手立て、さらには縦格子などの意匠的な工夫もあり悪い計画ではないが、建て売りのモデル住宅と云うことは設計・提案段階つまり計画時では住人が定まっていない。(現在の住人と計画案が必ずしも合っていない訳ではないが) つまりインフィルとしてのオブションの工夫が重ねられていると良かったのではないか? その意味では現建物の空間の構成・寸法、意匠が少し特殊過ぎるように思えた。70 - α (数多く他の賞をすでに獲得している)

長坂 大 80 + 73 = 153

長坂さんの最初に見た住宅「上賀茂の家」の印象は素晴らしかった . . . 外観・妻側の先端についた換気ガラス窓の開いた姿を見ても、また道路側長手のエレベーションと三段ほど上がった玄関への位置、すなわち内部はいくつかのスキップした床レベルを持っているが、その基準となる位置が玄関の床レベル設定となっていて、各室・設定された領域(テリトリー)へと分節されて行くなどかなり計算されたエレベーションだと云うことが解る。末端の一番高いデッキレベルについた建具も下枠が床レベルに隠れる隠し框とするなど長手に眺望を開くだけでなく、前後の抜け感を作ることも忘れない。内部の造作はモルタル仕上げの厨房を作るなど特殊な意匠が嫌味なくまとめられている。これらは住人であるクライアントのお陰とも言えるが、そのライフスタイルを見抜いた建築計画とのコラボレートと言える。80

かなり好評価を持ったが逆に「宇治のアトリエ」は「おや?」と思った作品だ 以前から写真で見ていたので、それなりに期待をして見学に挑んだ。しかしアプローチして行く道路から最初に目に飛び込んでくるのは、建物を斜め手前からサイドのエレベーションを見ることになるのだが、これが何とも貧相な印象を受ける。片流れ屋根と壁立面のプロポーションが悪いのに加えて敷地境の目隠し?植栽が「隣りとは関係ないよ」とあたかも言いたいがための設えである。当然のことながら建築は単体で自立的にある訳ではなく、ランドスケープと建築は一体でなければならない。植栽関係はクライアントでもある宮城さんの技であるなら、現計画の考え方には疑問を持たざるを得ない。

さて、導入口である主扉の設えや内部空間の計画自体は悪くない。しかしアトリエの平等院に向かう側の高さが必ずしも適切だと思えなかった。つまり片流れの勾配が強いことは、片流れの屋根がこの計画に適切であったかどうか つまり切り妻または変形の切り妻でも良かったし、寄せ棟さらには入母屋でも良かったかも知れない。言いたいことはこの建築、一室空間ではあるがスタッフアトリエと宮城さんの書齋的空間とに分節されていて、書齋空間についた平等院側の大開口には納得するものの、建築全体の空間バランスからするとスタッフ側の北側の立面高さ故に窮屈に感じてしまうのは私だけだろうか? と云うところだ。73

畠山文聡 76 + 76 = 152

畠山さんの建築は手堅い . . . 逆に云えば今ひとつ思い切りが足りない、と云えば言い過ぎかも知れないが、組織事務所としての大学の研究施設と自らの会社の研修施設を計画するにおいてはこれ以上の無理は出来ないのかも知れない。「近畿大学農学部第2共同研究棟」はその特殊なプログラム故に可能なこと不可能なことが示された上に設計がなされた。建築にとって、いわゆる優れた内部空間を持たないものの、大学キャンパスという特殊な敷地に相応しい利用計画から、不思議な外壁を構成している「ジャカゴ壁」つまり合板製造過程で排出する木芯を詰めたジャカゴパネルを含めた建築モジュールの割り出しに至るまで、研究施設としての極めて合理的な決定がなされている。76。

「NTT 西日本研修センター」にしてもいわゆる研修施設ビルディングタイプに満足することなく、研修プログラム・人数・時間を分析した上で光、自然環境との連鎖を取り込む新しい建築計画の解き方に挑戦している。76。
いや、「近畿大学農学部第2共同研究棟」にしても「NTT 西日本研修センター」にしても2作品とも密度高く設計が詰められていて、畠山・永石の優秀なユニットによる設計者の建築に向かう姿勢は正しく前を向いて気持ちが良かった。

菅正太郎 65 + 62 = 127

菅さんは2作品とも住宅である . . . ただ、残念ながら最初に見学を予定していた「Hexa」は外観だけで内部に入ることが出来なかった。それなりの事情はあるのだろうが、審査日にクライアントから鍵を借りることが出来ない程度に関係であると言うことが実証されてしまった訳だ。これは、建築そのものの評価と関係が無いと思われる方もおられるかも知れないが、そうではない、とくに[住宅]というある種特殊な建築プログラムを解こうとする計画行為は、クライアントと建築家は絶対的な信頼関係が必要だと信じるからである。65。

「Helix」は挑戦的な計画でGL階をピロティーで浮かせ、床はスパイラル状に連続すると云う伸びやかさを持っている。ただ計画がトータルの計画行為の結実したものとして、大文字の「建築」に至っていない。このことを解説すること自体難しいことではあるが、例として . . . スパイラル状に昇って行く床の連続は、それぞれの機能空間の床はフラットなので当然レベル差が生まれる。例えば、無理矢理スロープでつないでいるそのジャンクションの処理に納得出来る処理をして欲しかった。またそもそも構成されるいちいちの工夫が必要以上に多過ぎるようになってしまふし、建築ポキャブラリーは設計者のオリジナルではないのでプラスポイントとなる新しさは感じる事が出来なかった。62。

本多友常 70 + α + 75 = 150

「高野口小学校建築改築・改修」は本来のあるべき姿(建築と市民との繋がりに於いて)として、歴史を継承するための努力が建築家の提案から生まれ教育関係者の理解とともに結実したものである。日本以外の国々では当たり前に行われて来たことが、ようやく実現された好例であり、多くの評価を受けているのは当然である。惜しむらくは、建築計画上の創造性が弱かったことと(本設計者と関係がないかも知れないが)小学校全体計画の中、無造作に配置された遊泳プールが悲しい。70 + α

最後に見せて頂いた「樹林の家」はさほど期待をしていなかった分ある種の衝撃があった。崖地と云うことから(今回の審査させて頂いた住宅の3作品が何故

か崖地に計画されていたのでその計画比較も楽しかった) 鋼管杭から鉄骨のフレームを張り出しその上に木造の計画がされているのだが、敷地は対岸の明石に向かって円弧状に開いていることを考慮しながら、平面計画もそれぞれの機能用途に添って向きを変え、それぞれの内部空間が特徴づけられている。木造は平屋で構成され適度な内部高さに押さえられていて快適である。また崖地の下、敷地内から見返すと建物の床裏を見上げることになるが、この床裏も仕上げられていて本多さんの丁寧な仕事の姿勢を知ることができる。75。

岸下真理 78- α + 78 = 156- α

最初に見させてもらったのが「日本圧着端子製造」のオフィスビルだ。この作品も「西都教会」と同じく一昨年私が新建築の月評を執筆していた時から気になっていたものである。ただ、当時やけに学生じみた建築計画(解き方が一本気)で、こんなに執務面積に比較して共用空間(上下の動線)が大きく取られている計画は、話しとしては解らないではないものの普通のオフィスビルとして成立するのか?怪しいと思っていた。実際拝見するとエントランスを入ったところから普通のオフィスビルとは一味、二味違うことがすぐ解り、どこか呉服屋さんの帳場のような雰囲気、しかもその場で靴を脱いで上がる近代オフィスビルとは初めての体験であった。そのほかもコトほど左様に普通の近代的オフィスビルの設え(使い方プログラムが建築計画に与えること)と異なり、会社の使い方としてとても良く来ていて納得なのだが、良くも悪くも一切はオーナーの思考に応えるべく構築された特殊解である。78 - α 。(数多くの賞を受けている)

さてもう一つ、住宅「甲陽園目神山町の家」を拝見した。通常では尻込みするような崖地での計画である。他の崖地での計画と比較しても際立って厳しい条件と思える中、スキップした床レベルからそれぞれの機能と眺望を確保し、床・壁・天井のすべて(構造材を除く)をラワン合板で仕上げ、丁寧に解いたローコスト住宅であり、個別の機能空間として成立させながらの連続空間である。計画して来たことなのか現場での臨機対応なのか?良く解らないが、写真から受ける印象より数段良い評価が出来る。78。